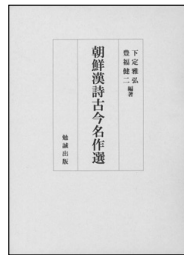


# 朝鮮漢詩研究の金字塔

下定雅弘 豊福健二 編著  
朝鮮漢詩古今名作選



A5判 384頁  
勉誠出版  
[本体 10,000円 + 税]

吉本  
一

まさに、朝鮮漢詩研究の金字塔が誕生したといつて過言ではないだろう。朝鮮文学・朝鮮史や漢詩に関心を持つ人たちにとって必読・必携の名著といえよう。ただ惜しいことには、三百数十頁の大著で、高額であるため、手軽に購入し、持ち歩きながら読むには適さない。今後、新書や文庫の分冊版も刊行されれば、より多くの読者に愛されるのではないだろうか。

『朝鮮漢詩古今名作選』は、古朝鮮時代から李氏朝鮮時代の終わりまでに作られた漢詩のうち名作一八〇余首を選定して、正確で自然な日本語の訳注を施したものである。朝鮮漢詩の骨格と容貌を把握し、名作の一首一首を味わえるようになってきている。

編著の下定雅弘・豊福健二両氏は、主に中国の古典文学を研究しておられるが、朝鮮漢詩に接して、中国の詩と共通す

る面を持ちつつも独特の味わいがあることに気づいたという。これを日本の読者に伝えたいと思ったのが本書の編訳の動機だとのこと。編者の見出した朝鮮漢詩の独特の味わいは、肉親に対する情愛の濃やかさ・深さ、民の生活の困苦の率直な表現、社会の不正を憤る情の激しさ、外からの侵攻に抗せんとする気概、党派闘争がもたらす苦悩、女性詩人による男女の愛の表現の可憐さ等々である。これらの点について、評者も賛意を表明する。

本書の学術的価値は、以下のような点にある。第一に、朝鮮漢詩の中でも真に価値のある古今の名作を発掘・選定している。第二に、正確で自然な日本語訳が付いている。これらの日本語訳は、編者らの多年にわたる中国文学研究の知見に裏打ちされており、十分に信頼が置ける。第三に、語釈が豊

富で詩句の典拠を明示している。注釈を見ると、中国の詩が朝鮮の知識人にどのように読まれていたのかが理解でき、日本・朝鮮・中国の学術交流への糸口となりうる。

朝鮮の詩歌には、漢詩とは別に、郷歌、歌辞、時調などがある。郷歌とは、七世紀末ごろから一〇世紀初めごろまで作られた定型詩である。『三国遺事』に一四首、『均如伝』に一首、合わせて二五首のみ現在に伝わっている。もう少し範囲を広げて考える説もあるが、いずれにしても数が少ない。しかも、漢字の音と訓を織り交ぜた郷札という独特な借字表記法によって記述されているため、いまだに十分に解読されていない。歌辞とは、一四世紀末から二〇世紀初めごろまで作られた詩歌と散文の中間的な文学である。士大夫、僧侶、宗教学、婦女子、平民など多くの人々が創作し、数も多く残されている。時調とは、時節歌謡、つまり当時流行していた歌という意味であり、本来は音楽的な概念だったが、近代になって西欧から流入してきた自由詩などと区別するために文学的な概念として使用されるようになった。一〇世紀末ごろから作られるはじめ、現代においても作られている。時調の最も基本的な形式は、初章（三・四・三・四）、中章（三・四・三・四）、終章（三・五・四・三）という、四三音から成るものだが、さまざまな形式があり、かなり自由に変えられる部分もある。

朝鮮には固有の文字がなかったため、漢字・漢文によって文章が書かれていた。一五世紀に至って訓民正音（ハングル）が創製されたけれども、知識層は依然として漢字・漢文で文章を書いた。したがって、漢詩は決して朝鮮詩歌の中で傍流ではなく重要な部分を占めている。本書が扱っているのは、朝鮮の漢詩と朝鮮語の詩歌の漢訳である。ぜひとも、多くの人に味わってほしい。

「はじめに」では、本書を執筆するに至った動機、研究の経緯や意義などを述べている。その中に、次のような記述がある。「古代から近代に至る朝鮮漢詩の名作を味読することは、今日の朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国・大韓民国）について我々が接することのできる文学・映画・音楽、その他の芸術を含む文化と相即しつつ、朝鮮、そして朝鮮民族の社会・文化と思想・感情について、立体的で深い理解を得る上で、大いに益する所がある」。日本と朝鮮民主主義人民共和国・大韓民国の関係は、昨今、特に緊張関係の中にあるが、お互いを理解するためにも、このような文化的交流が切実に望まれる。

本編は、時代別に区分されており、各時代に作られた代表的な漢詩の作者を紹介した後、名作漢詩と読み下し文を掲載し、現代語訳、語釈、補説などを付けている。

第一章は、古朝鮮時代から後三国時代までを扱っている。古

代の時代区分に関しては異説も多く、明確に分かれているわけではない。まず、檀君朝鮮（紀元前三〇〇年頃～紀元前一〇〇年頃）、箕子朝鮮（紀元前一〇〇〇年頃～紀元前一九五〇年頃）、衛滿朝鮮（紀元前一九五〇年頃～紀元前一〇八年）があったとされる。これらを併せて古朝鮮時代と呼ぶことがある。その後、原三国時代（紀元前後～紀元後三〇〇年頃）、三国時代（四世紀～七世紀）、南北朝時代（六九八年～九二六年）、後三国時代（八九二年～九三六年）が続く。麗玉の「筵篋引」、無名氏の「亀何歌」、瑠璃明王の「黄鳥歌」などは、五言詩が成立する以前の古い形式を残しており、朝鮮漢詩の出発点としての意義を持つ。

第二章は、高麗時代（九一八年～一三九二年）を扱っている。李奎報の「東明王篇並序」は、朝鮮最高の叙事詩のひとつであり、朝鮮史の重要資料でもある。これは本邦初の翻訳で、今後の研究にも資するところが大きい。この詩の紹介だけでも四〇頁にも及んでいる。

第三章から第五章までは、朝鮮時代（一三九二年～一九一〇年）と、韓国併合時代（一九一〇年～一九四五年）のうち一九二〇年までを扱っている。これらを合わせると、分量的に全体の半分以上を占めている。多くの詩人と多様な詩が取り上げられており、時間をかけて読みながらじっくりと味わうに値する。評者も同僚の佐藤浩一氏との共同研究を通じて、

『朝鮮女流漢詩選集 花束』について（『異文化交流』一八号、二〇一八年）で申師任堂・黄真伊・許蘭雪軒、「朝鮮の放浪詩人金笠の漢詩」（『異文化交流』一九号、二〇一九年）で金笠の漢詩を論じたことがある。偶然にも対象とした漢詩がほとんど重なっていない。本書と併せてお読みいただきたい。

巻末には、附録として、小辞典、関係地図、略年表が掲載されている。特に、小辞典では朝鮮の漢詩を理解するための用語の解説が施されており、読者にとってありがたい。

韓国の映画やドラマなどが日本でも見られるようになってきた。それらの中には歴史を素材としたものも多い。もちろんこれらは史実と異なる点が多いけれども、朝鮮の歴史は映画やドラマに劣らず非常に劇的で興味深い。『朝鮮漢詩古今名作選』の記述を補うような形で、朝鮮時代初期の歴史を少しだけ紹介してみよう。

高麗時代末期の一三八八年、明の前進基地である遼東地域への攻撃を命じられた李成桂・曹敏修らは、威化島（中朝国境を流れる鴨綠江下流に位置する中州）まで到達したが、状況的に難しいと判断して撤退した。その後、遠征を命じた禡王を廃し、曹敏修らがその子の昌王を立てた。翌年、李成桂と曹敏修が対立し、李成桂らは、曹敏修を流罪とし、昌王を廃して恭讓王を立てた。

# 中国年鑑2019

◎ 好評発売中 ◎

中国研究所 編・発行

明石書店 発売

1955年創刊。現代中国に関する最新・基本情報満載の、一国を扱う珍しい年鑑。

B5判 約500頁  
価格:18,000円+税

## ◆特集＝米中対立の構図

### ◆動向

政治、台湾・香港・マカオ・華僑、対外関係、経済、文化、社会

### ◆要覧・統計

国土と自然、人口、国のしくみ、軍事、少数民族、国民経済・国民生活、農業、工業、資源・エネルギー、交通運輸、対外経済、知的財産権、労働、暮らし、社会保障・医療制度、環境問題、NGO・NPO、教育、宗教ほか

### ◆資料

統計公報、重要文献、主要人事、2018年日誌ほか

※お問い合わせ・ご予約は  
中国研究所事務局まで

一般  
社団法人 中国研究所

〒112-0012

東京都文京区大塚 6-22-18

TEL: 03-3947-8029

FAX: 03-3947-8039

e-mail: c-chuken@tcn-catv.ne.jp

URL: <http://www.chuken1946.or.jp>

李成桂の友人であった鄭夢周は、李成桂が王座を奪おうとしていたのを知って対立した。ある日、鄭夢周が様子をうかがうために李成桂の家を訪ねたところ、李成桂の五男、李芳遠がもてなした。李芳遠は、できれば鄭夢周を仲間になりたいと、酒を注ぎながら歌を詠んだ。自分たちと一緒に新しい時代を生きようと提案したのである。

이런들 엇더하며 저런들 엇더하료, 만수산 (萬壽山) 드령  
출이 일거진들 엇더하리, 우리도 이누치 일거져 백년 (百年)  
스지 누리리라.

こうであろうといではないか。ああであろうといではないか。万寿山の葛の蔓がからまろうといではないか。我々もこのようからまっつて百年まで生きよう。

それに対して、鄭夢周はこう応えた。高麗王の忠臣として、ほかの王に仕えることはできないと、拒絶したのである。

이 몸이 죽고 죽어 일백 번 고쳐 죽어, 백골이 진토되어 뉘  
이라도 있고 없고, 님 향한 일편단심이야 가실 줄이 있으  
라.

この身が死に死んで、一百回繰り返して死んで、白骨が塵土となり、魂すらありやなしや。主への一片丹心（真心）の赤誠が消えることがあるうか。

これらの歌は「何如歌」「丹心歌」として現代の人々にもよく知られている。特に「丹心歌」は一途な忠誠心を表すものとして愛唱されている。口から口へと伝えられていたものが、

後に漢詩に訳され、さらに時調に変容した。漢詩版は、本書の一四一〜一四二頁と一三六〜一三八頁に掲載されている。

この返歌を聞いた李芳遠は鄭夢周の意志を変えることはできないと諦め、部下に命じて鄭夢周の帰り道に待ち伏せさせて彼を殺害した。

一三九二年、李成桂は、恭讓王を廢して王位に就いた。翌年、明の洪武帝の裁可を経て、国号を朝鮮とした。李成桂(太祖)は、第二夫人を寵愛し、その子、李芳碩を後継者にしようとしていた。このことを知った第一夫人の子らは憤慨した。朝鮮建国に大きく貢献した五男、李芳遠は、これを画策した臣下らを殺害し、第二夫人の子らも殺害した。太祖はこの知らせを聞いて激怒し、嘆き悲しんだ。そして、次男、李芳果に王位を譲って都を去った。李芳果(定宗)は第二代王となったが、二年あまりで、弟の李芳遠に王位を譲った。李芳遠(太宗)が第三代王となった。太宗は血なまぐさい権力闘争の末に王位に就いたが、在位期間中は善政を施し、国家的基盤を確立した。太宗の後を継いで、三男、李昬(世宗)が第四代王となった。世宗は、訓民正音(ハングル)の創製をはじめとして、数多くの輝かしい治績を残した。彼は晩年、長男、李珣に王位を譲った。しかし、李珣が虚弱だったため、その後を心配し、長孫、李弘暉のことを臣下たちに頼んだ。李珣(文

宗)は第五代王となったが、病弱で、二年あまりでこの世を去った。文宗もまた後のことを心配し、長男、李弘暉のことを臣下たちに頼んだ。李弘暉(端宗)が第六代王となった。しかし、即位したとき、数え年一二歳にすぎなかった。世宗の次男、李瑀は、一部の臣下たちと画策し、甥の端宗から王位を篡奪した。李瑀(世祖)が第七代王となった。世宗や文宗の遺言を守って端宗を復位させようとした忠臣らだったが、この企てが発覚し、世祖らの追及を受けることになった。成三問・朴彭年・河緯地・李埜・柳誠源・兪応孚らは、処刑されたり自殺したりした。彼らを死六臣と呼ぶ。また、金時習・元昊・李孟専・趙旅・成聘寿・南孝温らは、処刑はされなかったが、官職を辞して抵抗の意を示した。彼らを生六臣と呼ぶ。一方、端宗は、世祖らによって、太上王(退位した王)から一族へ、さらに庶民の身分へと落とされ、自殺に追いやられたとされる。成三問・李埜・兪応孚・端宗の漢詩も本書に収録されている。この後も、朝鮮の歴史は劇的に展開する。

朝鮮時代の王は、二七代まで続いた。廟号は、太祖、定宗、太宗、世宗、文宗、端宗、世祖、睿宗、成宗、燕山君、中宗、仁宗、明宗、宣祖、光海君、仁祖、孝宗、顯宗、肅宗、景宗、英祖、正祖、純祖、憲宗、哲宗、高宗、純宗である。これらを見ると、「祖」「宗」「君」となっている。

「ㄱ祖」は本来、王朝の始祖に与えられるものであった。が、李氏朝鮮では、「ㄱ祖」が複数いる。世祖の場合、端宗から王位を奪って弱体化していた王朝を復興させたため、建国に匹敵する偉業を成し遂げたという理由で「ㄱ祖」が与えられ、また世宗の精神を継承したという理由から世祖と名づけられた。仁祖の場合、光海君が廢位されて王位に就いたため、やはり新王朝の建国に匹敵するという理由で「ㄱ祖」が与えられた。また、宣祖、英祖、正祖、純祖の場合、もともとの廟号は宣宗、英宗、正宗、純宗であったが、後の王の時代に「ㄱ祖」に格上げされた。

「ㄴ宗」は通常の廟号であり、徳のある王に与えられた。現代においては世宗が最も高く評価されているが、当時はそれほど高い評価を得ていなかった。そのためか、現代的な評価を加味して、世宗大王と呼ばれている。端宗の場合、世祖に王座を奪われ、魯山君と呼ばれていたが、後に端宗という廟号が与えられた。

「ㄷ君」は、生前から男の王族に付けられる称号であって、正確には廟号ではない。王の座から追放されたため、王として認められなかったのである。

以上のような事情もあって、中には、太祖と太宗、世祖と世宗、仁祖と仁宗、純祖と純宗のように、似通っていてまぎ

らわしい廟号がある。しかし、似通っていても明らかに別人であり、間違っではならない。

本書が非常に優れた研究成果であることは間違いないが、誤植が散見されることは指摘しておかねばならない。例えば、世祖のことを世宗（一四六頁・一八一頁）、李芳遠のことを李成桂（一四二頁）と書いたりしている。また、恭愍王を共愍王（一一〇～一一二頁）、金宗瑞を金宗端（一五〇～一五一頁）、景哀王を景愛王（二五七頁）と書いている。その他にも細かい誤字があるけれども、いちいち取り上げない。誤植を修正した改訂版が出されることを期待する。

最後に、蛇足かもしれないが、ひとこと付け加えておく。本書一八三～一八四頁に、申師任堂の「踰大関嶺望親庭（大関嶺を踰えて親庭を望む）」が掲載されている。朝鮮語の「親庭」は、結婚した女性の実家を指す。本書の解説では父母と書かれている。朝鮮の漢詩において、漢語が本来の意味で使われているか、朝鮮語の中での意味で使われているかなども、検討の余地があるかもしれない。

（よしもと・はじめ 東海大学）